



Title	まとめ
Author(s)	加藤, 博文
Citation	203-213 新しいアイヌ史の構築：先史編・古代編・中世編：「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/56298
Type	report
File Information	まとめ.pdf



[Instructions for use](#)

まとめ

—新しいアイヌ史の構築：
マルチヴォイスの歴史に向けて—

加藤 博文

1. 日本史としてのアイヌ史は成り立つのか
2. アイヌ考古学という概念の成立に至る背景
3. アイヌ考古学
4. アイヌ考古学と先住民考古学
5. 歴史の語りにおける
マルチヴォカリティの重要性

まとめ

—新しいアイヌ史の構築：マルチヴォイスの歴史にむけて—

加藤 博文

1. 日本史としてのアイヌ史は成り立つのか

日本史においてアイヌ史は語りえるのであろうか。かつて佐々木利和は、「アイヌ史」は成立するのだろうか」という問いかけを北方史におけるシンポジウムにおいて投げかけた（佐々木利和 1988）。そこで指摘された、「主体的にアイヌをとらえていってその結果、彼らの歴史はなお「日本史」なのだろうか。」（佐々木 1988:309）と問い、さらに「アイヌ史」が成り立つ条件として「アイヌであれ、シサムであれ、要は、いかに主体的に取り組む研究者を多出させるかにかかっている。」（Ibid.: 314）という主張は、今においても変わらず、なお課題のままで残されている。

ワーキングのメンバーの一人である蓑島栄紀は、現在のアイヌ史や北方史研究が、時代や分野を問わずに活況を呈していると評価する一方で、「アイヌ史そのもの」について追求するという方向性は、一部の研究を除いて等閑視されてきたと指摘する（蓑島 2011）。そして日本列島における歴史叙述において国民国家史的な「日本史」像が厳然として存立し続けている一方で、「アイヌ民族の立場からなる「アイヌ史」が未完成のままにある現状はあまりにバランスを欠いている」「アイヌ民族を主体とする「先住民族史」としてのアイヌ史の構築は緊急の課題であろう」と述べている（Ibid.: 6）。つまり、新規資料が蓄積され、研究者の関心が集まるにも関わらず、先の佐々木の問題提起以降 30 年が過ぎても、誰のための歴史が語られているのか、または誰に対して歴史を語っているのかという点の議論は不在であったということになる。

アイヌ民族を主体とするアイヌ史の構築を目指す際に課題となるのは、研究や研究者の立ち位置のみではない。今ひとつ、検討しなければいけない課題としては、従来の日本史や北方史の基盤となってきた時代区分がある。歴史研究においては、古代・中世・近世・近代・現代という時代区分が広く用いられる。この時代区分については、日本史に限らず考古学でも同様に普遍的に用いられてきており、また概説書や博物館展示にも広く通用しており、その再検討は容易ではない。もうひとりのワーキングメンバーである谷本晃久は、2004 年にアイヌ史の可能性を論じる中で、時代区分論の課題といくつかのアイヌ史独自の時代区分の取り組みを提示し、比較検討している（谷本 2004）。

ここで改めてこの問題点を指摘するのは、次の理由からである。古代・中世・近世という時代区分を通貫する枠組みは国家形成史である。日本史は、この枠組みにおいて原始古代段階から封建的中世へ、そして封建的近世を経由して封建制の解体と近代国家の成立へという時代的変遷を描いている。そして国民国家の成立と発展という帰着へたどり着く。このようなコンテキストにおいて語られる以上、アイヌ史は国民の歴史へ飲み込まれ、同化されていく存在でしかない。そして政治史を中心に、領土や文化的同一性を拡張させる戦略をとる国家側からの歴

史観は、中心と周縁の歴史的構図を提示し、アイヌ民族はその構図において国家の周縁的民族として位置づけられてしまう。

アイヌ史を独自に構築するためには、この構図から脱却が必要となる。では、どのような新たな構図が必要なのか。残念ながら、現段階で我々が提示できる新たな構図は準備できていない。しかし、従来の語り口、国家形成にいたる歴史的流れを説明する語り口でないことは明らかである。ワーキングにとって大きな課題であり、2012年度からの第二期のプロジェクトの中で試案を提示していきたいと考えている。

2. アイヌ考古学という概念の成立に至る背景

アイヌ民族の歴史の構築において、考古学資料が重要な位置を占めていることは多言を要しない。しかしながら、これまでの北海道における考古学が構築してきた文化編年（時期区分）は、出土資料に基づきながらも、決してアイヌ民族の歴史を主体としたものでない。

古代から中近世の国家に隣接する非国家社会について考古学文化を用いて説明する視点には、その集団の歴史性の不在を強調し周辺化する傾向がある。この基本的構造のために北海道考古学の時期区分は、大きく本州を中心とした時期（時代）区分に準拠しながらも、非農耕化そして非階層化という国家形成の論理に従ったネガティブなニュアンスを残す縄文文化という段階を経て、オホーツク文化、擦文文化、そしてアイヌ文化期という変遷観が提示されてきた。この枠組みこそが、アイヌ文化の成立についても北海道側の集団の主体的変化という視点の欠如を招いていたといえる。このコンテクストでは、あくまでの歴史の動態を生み出すのは主流社会であり、非国家社会は、国家側の生み出す時代変化の波に翻弄されるという「歴史的物語」に沿った解釈のみが目につくことになる。

例えば、1971年に自然人類学、考古学、言語学、文化人類学の視点から議論した「シンポジウム アイヌ」が行われた（埴原ほか 1972）。その中で吉崎昌一は、擦文文化の終焉については、中世以降の日本海交易の活発化と武力をもった和人商人のコロニーの形成、そこを通じた交易による鉄製品、漆器、陶磁器の流入が契機となって擦文文化が崩壊したと指摘している（吉崎 1972: 65）。そしてその崩壊過程において、北海道内の集団に我々という仲間意識が形成された結果、「アイヌ文化」が成立するとした（吉崎 1972: 65）。

吉崎による考古学から見た文化変遷の概要、埴原による自然人類学の観点からの北海道の集団系統に関する研究成果にふまえて、シンポジウム参加者（埴原和郎：形質人類学、吉崎昌一：考古学、浅井亨：言語学、河野本道：文化人類学）は、現在のアイヌが文化変容 *acculturation* を受けており、「アイヌ民族」は過去のもので、和人との接触があまりなかった時期の集団に限定するという認識を示す。そして民族形成の過程を「プレアイヌ」：縄文文化と続縄文文化⇒「プロトアイヌ」：擦文文化⇒「アイヌ」：近世アイヌ⇒「アイノイド」：近代以降と変化していくという理解を提示している（埴原ほか 1972: 17）。この1972年の段階で提示された「典型的なアイヌ文化」を規定する枠組みと民族集団形成のモデルは、その後の多くの研究に影響をあたえ、継承されていった。

もう一点、このシンポジウムにおける考古学から見たアイヌ文化の位置づけとして吉崎による発言に注目したいどの段階をアイヌ文化と規定すべきかという議論の中で、吉崎は、次のよ

うに発言する。江戸時代・明治前半はアイヌ文化と規定してよいが、「縄文文化を「日本文化」と規定出来ないように、北海道の縄文文化や続縄文文化をアイヌ文化と規定出来ないのは自明の理です」と述べている（吉崎 1972: 93）。さらに北海道における先史文化の独自性（異質性 エキゾチックさ）について「擦文文化がそんなに独自の性格を持つ異質なものだとしたら、続縄文文化も、また縄文文化のなかにすら独自性を認めなくてはならない」（吉崎 1972: 94）とし、その理由として「擦文文化 = 農耕文化論を ぶちあげた僕としては抵抗を感じるな」（吉崎 1972: 94）とも述べている。吉崎は、擦文と土師器の間の差は紋様や整形の差でありそれらは本質ではないという。その視点で論じれば、弥生文化も複数に分割され、縄文文化も統一概念で規定できなくなると述べている（吉崎 1972: 95）。

正にここに、北海道における縄文文化や続縄文文化、擦文文化を列島の文化の枠組みで論じなければいけなかった「日本考古学」の限界がある。その傾向は、1980年代を迎えて「アイヌ考古学」という枠組みが唱えられるようになって引き継がれていった。

3. アイヌ考古学

1972年の『シンポジウム アイヌ』における議論が、その後の研究にどのように具体的に継承されていったのかという点は、研究史的にもさらに検討していく必要がある。1970年代初頭のアイヌと考古学をめぐる動きで注目すべきものがもう一つある。『シンポジウム アイヌ』と同年に上梓された渡辺仁による”The Ainu Ecosystem”と「アイヌ文化の成立：民族・歴史・考古諸学の合流点」である（Watanabe 1972, 渡辺 1972）。

渡辺の研究は、アイヌ文化自体を独自に考察する流れを生み出す契機となった点では、その後のアイヌ研究に大きく貢献した。渡辺のアイヌ文化観は、「クマ祭複合体」としてとらえる点にその特徴があり、その性格を物質文化の側面から捉えている。この渡辺の研究は、これまでの研究と異なり「日本文化や日本人起源論」の流れとは無関係にアイヌ文化をとらえようとした点にその特徴がある（百瀬 2004）。

しかし一方で渡辺のアイヌ研究には、生態学的手法を駆使して環境への適応行動の構造を明らかにしようとする視点があること、そしてその最終的な目標は、アイヌ文化の構造の解明というよりも、先史学の対象である狩猟採集民社会の基本的問題を理解することであり、アイヌ民族誌は狩猟採集民社会を理解するための道具であったという側面を明確に認識する必要がある。さらに踏み込んで言及すれば、渡辺には失われゆくアイヌ文化に先史文化を復元する上で有効な情報が含まれているという前提、つまり原始性を見出そうとしている（加藤 2010）。

実はこのような視点は、渡辺に先立つ1950年代に「アイヌ考古学」を主張した駒井和愛の言説にその系譜を見出すことができる（駒井 1950）。駒井は、このモヨロ貝塚の調査の後より「アイヌ考古学」という言葉を多用するようになる。駒井の「アイヌ考古学」とはどのような枠組みと目的をもっていたのであろうか。駒井により記された『アイヌの貝塚』（1952）の中にその視線を見出すことができる。そこには、アイヌ文化の中に日本列島の先史文化の残影を追い求めるようとする視線が色濃く示されている。例えば「アイヌ人はカハシンジュの貝殻を使って、このような穀物の穂をつんだりいたしますが、そのやり方は日本人が弥生式土器の時代に石包丁を用いておこなっていた風習に似ていないでしょうか。」（駒井 1952: 15）。「われわれの同胞

でありながらアイヌのうちにはまだまだ珍しい風俗や習慣がつつわっており、それがなんらかの意味で、日本文化につながりをもっているのですから面白いではありませんか。」(駒井 1952: 15-16)。「わが文献に出てくる蝦夷がアイヌで、そのアイヌがいまは北海道のどこどこに住んでいるに過ぎないこと、アイヌの間に私たちの大昔の生活用具などが伝わって、そのまま今も使われているために、それによって、日本人の古代の有様がわかることなどを見ても、われわれにアイヌの研究が大切な仕事であることがうなずけるでしょう。」(駒井 1952: 16)と述べている。

これらの言葉は、考古学におけるアイヌ文化の研究関心が日本列島の文化を復元するための基礎資料あるいは比較資料として期待されていたことを明示している。

このような1970年代の考古学におけるアイヌ文化への関心は、1980年代のアイヌ考古学という研究領域の確立へとつながっていく。1980年には宇田川洋による『アイヌ考古学』が上梓され(宇田川 1980)、また1984年には藤本強によって「アイヌ考古学をめぐる諸問題」が『北海道考古学』誌上に掲載される。これ以降「アイヌ考古学」と領域概念が一定の認知を受けて研究対象として扱われるようになる。

宇田川による研究は、基本的な枠組みにおいて渡辺の研究の系譜を引き継いでいる。アイヌ文化を独自の研究対象として取り上げアイヌ文化というものを定義し位置づけようと取り組んでいる。一方でその文化の担い手集団については、先の『シンポジウム アイヌ』において提起された「プレアイヌ」：縄文文化と続縄文文化⇒「プロトアイヌ」：擦文文化⇒「アイヌ」：近世アイヌ⇒「アイノイド」：近代以降「アイノイド」「アイヌ」「プロトアイヌ」「プレアイヌ」という考古学文化の変遷と対比させた民族形成モデルに理解を示している(宇田川の1980年の記述では、「プレアイヌ」が縄文以前、「プロトアイヌ」が縄文と続縄文とされている)。

藤本による「アイヌ考古学」の理解は、駒井が主張したアイヌ考古学に対する位置づけをより受け継いだものである。藤本強は、アイヌ考古学の課題と意義として、①アイヌ文化は東北日本の縄文文化の伝統を色濃く伝えているので、日本の先史文化の解釈のために重要な参考になる。②アイヌ社会は、採集経済のなかでもっとも発達した社会組織をもっていたので人類史的スケールの研究の上で重要である、と述べている(藤本 1984)。

このように1980年代に登場する「アイヌ考古学」という枠組みには、一方で渡辺=宇田川ラインで継承されるその独自の文化を解明するという流れを生み出しながらも、もう一方では、相変わらず日本考古学において先史文化を知るための重要な手がかりとして認識され、そして失われゆく貴重な民族文化として認識されつつも、そこには生きた人々の生活や、彼らにとっての文化の重要性、誰のための研究なのかという問いがなされてはこなかったことを確認すべきである。さらに重要な点は、渡辺の研究がシカゴにおけるシンポジウム「man the hunter」を通じて、広く世界的にアイヌについて日本を代表する狩猟採集民集団として報告し、その後の海外の研究者イメージ形成に大きな影響を与えた点である。正に考古学解釈や文化の評価が先住民族の歴史や集団のイメージに影響を与えているかという身近な例である(Wobst 2005: 21-24)。この点を忘れずに認識していく必要がある。

4. アイヌ考古学と先住民考古学

現在、考古学研究において研究者の立ち位置や、先住民コミュニティも含めた多様な地域社会との関わりをめぐる議論が活発である（松田・岡村 2005, Matsuda and Okamura 2011, Merriman 2004 など）。

特に公共考古学 (Public Archaeology) は、シャドラー・ホールによれば「公共と相互に関わり、また関わる潜在性を有するあらゆる領域の考古学的活動」と定義され (Shadla-Hall 1994:147)、この今日的な意味での先導者であるアコは、考古学という学問を誰もが参加できるものにすることを目指し、「過去に対する異なる見方、過去の異なる利用の仕方、そして過去に対する政治的に異なる立場が存在する」ということを認識することが重要と考えていたという (シャドラーホール 2010: 8)。このような公共考古学の視座は、対象となる地域社会を構成するコミュニティの多様性についても、当然配慮することとなり、この動きの中から、地域に基盤を置く考古学の取り組みとしてのコミュニティ考古学 (Community Archaeology/ Community-based archaeology) という取り組みや、さらに先住民や彼らの歴史文化遺産と考古学との関係に焦点を当てた研究領域としての先住民考古学 (Indigenous Archaeology) が生まれてきた。

先住民考古学は、わが国では、まだなじみの薄い領域である。しかし、先住民と歴史文化遺産との問題を長く議論してきたアメリカやカナダ、オーストラリアやニュージーランドでは、早くから議論が展開されてきた。国際会議においてもいくつものセッションが立つ研究領域である。

アイヌ民族と考古学との関係で課題となるのは、明らかに北海道における歴史の変遷がアイヌ民族の形成過程と無関係ではいられない一方で、考古学の文化名称として特定の時間幅を示す概念として「アイヌ文化 (期)」という概念が用いられている点である。このような用法は、いかにもアイヌ文化がある段階をもって出現し、それ以前文化段階との間になにかしらの断絶を想起される用法である。事実、先に見たように、かつては「北海道の縄文文化や続縄文文化をアイヌ文化と規定出来ないのは自明の理です」という発言がでてきてもいる (吉崎 1972: 93)。

アイヌ文化と考古学との関わりを考える上で、重要な視点は、上記の言説とは一見相容れない印象を与えるアイヌ文化を日本列島の基層文化と結びつける論調である。

百瀬響は、「アイヌ文化成立論」の現代的意味について」とする論考において、1979 年以降の「日本文化論」「日本人起源論」「日本文化起源論」から発展する「アイヌ・和人同祖論」、さらに 1987 年の設立以降に国際日本文化センターから発信された「日本文化起源論」とリンクした「アイヌ文化成立論」の問題点を指摘する (百瀬 2004)。この過程で自然人類学の研究は、「原日本人」としての縄文人の系譜とその後の日本民族集団の形成過程に研究の焦点を合わせて成果を上げる一方で、①環境論的観点からのアイヌ文化の再認識ないし評価、②「日本人」と「アイヌ」をつなぐ「原日本人」研究を生み出し、③「残存」するアイヌ文化から縄文文化を類推する方法がとられたと指摘する (Ibid.)。

近年では、形質人類学における伝統的な形質的特徴の研究に加えて 1980 年代以降には分子遺伝学の領域からのアイヌの系統性を論じる視点も注目されるようになってきている。分子遺

伝学の近年の成果で注目すべきは、日本列島の縄文集団の中に地域的な多様性が明確に見られることが明らかにされたことである（本報告書における安達論文を参照）。既に篠田謙一が『日本人になった祖先たち』において「日本人集団」を構成する集団遺伝的多様性を mt-DNA から提示している（篠田 2007）。さらに安達登らは、北海道における縄文時代の先史集団と本州（関東）の縄文時代の先史集団との間に明確な 集団遺伝的な差異を見出している（Adachi et al. 2011）。つまり同じ縄文時代の日本列島においても集団的には北海道島（本州北部を含む）と本州島中央部（関東）の集団は系統的に相互に独立し、その後の集団形成の歴史を辿ってきたことになる。

この研究成果は、考古学研究にも大きく影響してくる。これまで繰り返し見てきたように、日本列島においては、完新世初頭の約 1 万年間の期間を縄文文化と呼称してきた。土器文化圏や生業活動の地域差を認めながらも、縄文文化というひとつの考古学文化の存在を前提として議論がなされてきた。北海道においても北方の環境的独自性を意識しつつ、北の縄文という用語が広く流布し、日本列島の縄文文化の一部として語られてきた。しかし、上述した分子遺伝学の研究に従うならば、その前提の見直しが必要となってくる。

このようにこれまでのアイヌ史、アイヌ民族の歴史文化遺産に対する考古学の取り組みを概観してみると、先住民考古学が指摘する、従来の考古学と先住民との関係が北海道においても例外なくあてはなる状況を意識せずにはいられない。

2010 年に文化庁が実施した「アイヌ政策に関する研究の推進・連携等体制構築の検討事業」の調査では、ヒアリングにおいて次のような発言が掲載されている「特に考古学の中では、ほとんど和人だけで研究者が構成されているという現状がある。その中で我々が紡ぎ出しているアイヌ史とかアイヌ像というのが、果たしてアイヌの方々に今どう受けとめられているのかという問題がものすごく大きくなってきているような気がする。我々が語る 歴史というのが、過去に先住民という立場がなかなか認められなくて、歴史性というものに物すごく重きを置いてアイヌ像を語られてきた人たちとの間にどういふそごが生じていくかということが気になる。我々自身は、考古学だから現地赶赴いて、その土地の人々の理解と協力を得て初めて調査ができるが、我々がやる調査というのが、果たしてアイヌの方々にとって一体どういう意味を持ち得るのか、歴史はだれのものか、遺跡とか資料は一体だれのものかという帰属の問題がすごく気になる（大学等研究機関関係者）」（文化庁 2010: 69-70）。

このような発言以外でも、アイヌ文化やその歴史がアイヌ民族を主体として語るというスタンスが現在にいたっても研究者の間で認識されているとは思えない。なぜそのような状況が続くのであろうか。おそらく、その理由は「日本史」および「日本考古学」が複数の民族形成史を語る術を有していないことにある。アイヌ史を「日本史」や「日本考古学」の枠組みにおいて語るためには、これらの研究が複数の民族史を語るものへと脱却する必要があるのである。

先住民考古学では、従来の考古学が、先住民の歴史文化遺産を研究対象としながらも、そこに先住民のための視点や、研究成果の還元、そしてなによりも先住民の研究や資料解釈への参画の機会を創出する努力を果たしてこなかったことを反省する。そして先住民自身による考古学研究の実践と先住民の立場に立った非先住民研究者による研究の実践を目指している（Nicholas and Andrews 1997: 3; Smith and Wobst 2005: 7）。このような動きは先にあげた、佐々木

氏の「アイヌであれ、シサムであれ、要は、いかに主体的に取り組む研究者を多出させるか」（佐々木 1988: 314）という提言への一つの回答になるであろう。

先住民考古学者であるワトキンスは、先住民族に関わる研究者のアプローチを次の四つに分類している（Watkins 2008）。第一は「植民地的研究」であり、第二は「合意による調査」、第三は「契約による調査」、第四が「協力的調査」である。第一の「植民地的調査」は、自ずと知れた調査対象集団を全く考慮せずに実施する類の研究である（Zimmerman, 2001:169）。このような手法がいかに「科学的衣」を纏おうとも、調査者が歴史の救済を目指していたとしても、それが調査対象と深く関わる集団を関与させることなく、また彼らの望み、願い、感情を考慮することなく実施される場合は、望ましいものでないことは明らかであろう。また「合意による調査」であっても、「契約による調査」であってもそれは行政的な、国や権力側の公共性であった場合には、そこでの合意や契約に真の知の共有はありえない。ワトキンスは、第四の「協力的調査」の特徴として、全ての当事者に利益をもたらす研究プログラムであることを強調した。調査するものと調査されるものの関係性を乗り越えて、各当事者が関係する全ての当事者の願いを適切に満たす調査を実現すべく、調査プログラムの全過程で「協力して」取り組むことがそこでは求められている。

我々が目指すべき方向性は、国家を形成しない社会がどのように国家に経済的、社会的、宗教的に飲み込まれるのか、という歴史の描き方ではないはずである。国家側からの一方的な歴史描写でもない。北海道島という長い歴史の変遷をもつ土地に人々が生き、形成してきた歴史を新たな枠組みから構築することにある。北海道島には多くの異なる歴史的背景をもつ人々が暮らしている。これが現実である。その中で考古学者が目指すべきは、地域に関わる全ての当事者が、対等のパートナーとして関与し、地域の遺産を保護管理するプログラムを作り出していくことである。そして先住民族の歴史を描くための史的枠組みの構築を目指すことが望まれる。また我々は、「考古学は、過去における文化的アイデンティティを作り出す強力な道具である」（Smith and Wobst 2005: 14）ことを十分に理解している。そしてまた、考古学者が地域社会とのパートナーシップなしでは生きていけないのであることも理解しているはずである。

5. 歴史の語りにおけるマルチヴォカリティの重要性

現代の考古学において多様な語りの必要性は、改めて指摘するまでもないであろう。しかし、その必要性が認識される一方で、アイヌ民族の歴史の過去の語り口の理論的・方法論的取り組みは、不十分なままである。国家を形成しない社会がどのように国家に経済的、社会的、宗教的に飲み込まれるのか、という歴史の描き方は、国家側からの一方的な歴史描写でしかない。小川英文は、「日本考古学は、「文明」へと向かう人類の足跡の物語以外の語り口をもっていなかった」と指摘し、またその特性として「時代ごとの技術的先進性・先端性を代表する遺物とその連続性を中心に語り、同時代に存在している狩猟採集社会についての語り口をもたなかった」と理論的・方法論的欠如を指摘する（小川 2000: 285）。まさに正鵠を得た指摘であるといえよう。

この国を構成する歴史は、一つではない。また語りもいくつも存在する。特定の人間のみが歴史を語れるのではなく、歴史には自者と複数の他者がある。歴史の解釈にもとめられるのは、“multivocality”（語りの多様性）である。近年、榎森進による『アイヌ民族の歴史』（榎

森 2007) や、プロジェクトメンバーの瀬川拓郎による一連の著作など、アイヌ史を語る動きに大きな変化が見られる。

北海道島は本来、先住民族であるアイヌの生活する大地である。これまでに多くの遺跡が調査研究されてきたが、そこでの考古学者の視点や考察の枠組みにおいて、考古学者の言説のもつ政治性や文化遺産の帰属権問題、文化遺産と知的財産権をめぐる問題など方法論的問題について意識され議論されてきたであろうか。これから先に歴史文化遺産の評価や解釈において先住民族側の価値観や意向の反映が求められた時に、現在のわれわれの理論的方法論的基盤は、どこまでその有効性を保てるのであろうか。これらの課題は、資料が蓄積される一方で、課題として積み残されたままである。

歴史の構築には、大きく二つの重要な役割がある。一つは、歴史を知ることで「われら」という集団的アイデンティティが芽生え、自らの歴史や文化に誇りを抱くことが可能となる点である。もう一つは、他の集団に自らの歴史と文化の独自性を伝えることが可能となり、多文化の豊かさや独自性を知る機会を提供できる点である。この点を深く理解して次の議論を進展させていきたいと考えている。

参考文献

- 宇田川洋 1980『アイヌ考古学』、東京、教育社
- 宇田川洋 1984『イオマンテの考古学』、東京、東京大学出版会
- 榎森進 2007『アイヌ民族の歴史』、東京、草風社
- 小川英文 2000「第9章 狩猟採集社会と農耕社会の交流：相互関係の視覚」 小川英文編『現代の考古学 5 交流の考古学』、266-295 頁、東京、同成社
- 加藤博文 2009「先住民考古学という視座—文化遺産・先住民族・考古学の課題—」、『北海道考古学』、45号、pp. 31—44
- 加藤博文 2009「アイヌ研究において考古学の果たすべき役割とは何か」、『アイヌ研究の現在と未来』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター叢書、pp. 100-113 頁、北海道大学出版会
- 佐々木利和 1988「アイヌ史は成立するのだろうか」北海道・東北史研究会編『北からの日本史』東京、三省堂
- 篠田謙一 2007『日本人になった祖先たち—DNA から解明するその多元的構造』、東京、NHK ブックスシャドホール、T. 2010「パブリック・アーケオロジー—その考察領域よび 21 世紀における発展」文化遺産国際協力コンソーシアム『第6回 文化遺産国際協力コンソーシアム研究会報告書 遺跡の情報発信と地域への還元—パブリック・アーケオロジーから見る国際協力—』、東京、東京文化財研究所
- (http://www.jcic-heritage.jp/doc/pdf/2010Report_6thSociety_jp.pdf: 2012年2月27日アクセス)
- 瀬川拓郎 2005『アイヌエコシステムの考古学』、札幌、北海道図書企画センター
- 瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史 海と宝のノマド』(講談社メチエ)、東京、講談社
- 瀬川拓郎 2011『アイヌの世界 海と宝のノマド』(講談社メチエ)、東京、講談社
- 谷本晃久 2004「アイヌ史の可能性」、小谷凱宣編『海外のアイヌ文化財・現状と歴史:第17回「大

- 学と科学」公開シンポジウム発表収録集』、名古屋、南山大学人類学研究所
- 日本学術会議史学委員会 2010 『報告 史学分野の展望—国史を超えて人類の歴史へ—』 日本学術会議 (<http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-h-1-6.pdf>, 2012年2月23日アクセス)。
- 埴原和郎、藤本英夫、浅井亨、吉崎昌一、河野本道、乳井洋一 1972 『シンポジウム アイヌ—その起源と文化形成』、札幌、北海道大学図書刊行会
- 藤本強 1984 「アイヌ考古学をめぐる諸問題」『北海道考古学』20、pp. 80-82.
- 文化庁 2010 『アイヌ文化に関する研究の推進・連携等体制構築の検討事業 報告書』、(事業実施機関 北海道大学アイヌ・先住民研究センター)
- (<http://www.bunka.go.jp/bunkazai/ainu/pdf/houkokusho.pdf>: 2012年2月23日アクセス)
- 松田陽・岡村勝行 2005 「パブリック考古学最前線 (1)」『考古学研究』52(1)、pp. 100-103.
- 蓑島栄紀 2011 「序 アイヌ史を問いなおす」『アイヌ史を問いなおす：生態・交流・文化継承』、東京、勉誠出版
- 百瀬響 2004 「アイヌ文化成立論」の現代的意味について」宇田川洋先生華甲記念論文集刊行実行委員会編『アイヌ文化の成立：宇田川洋先生華甲記念論文集』、札幌、北海道出版企画センター
- 渡辺仁 1972 「アイヌ文化の成立—民族・歴史・考古諸学の合流点—」『考古学雑誌』58(3), pp. 47-64.
- Noboru Adachi, Ken-ichi Shinoda, Kazuo Umetsu, Takashi Kitano, Hirofumi Matsu-mura, Ryuzo Fujiyama, Junmei Sawada, and Masashi Tanaka 2011 Mitochondrial DNA Analysis of Hokkaido Jomon Skeletons: Remnants of Archaic Maternal Lineages at the Southwestern Edge of Former Beringia, *American Journal of Physical Anthropology*146, pp.346-360.
- Merriman, N. (ed.) 2004 *Public Archaeology*. London, Routledge.
- Nicholas, G and T.D. Andrews (eds.) 1997 *At a crossroads: Archaeology and First Peoples in Canada*, Archaeology Press/ Simon Fraser University, Burnaby
- Okamura Katsuyuki and Akira Matsuda (eds.) 2011 *New perspectives in Global Public Archaeology*, London, Springer
- Shadla-Hall, T. 1999 Editorial: Public Archaeology. *European Journal of Archaeology* 2(2), pp.147-158.
- Smith, C. and Wobst, M. (eds.) 2005 *Indigenous Archaeologies –Decolonizing Theory and Practice*. London, Routledge.
- Watanabe Hitoshi 1972 *The Ainu Ecosystem*, Tokyo, University of Tokyo Press.
- Watkins J. 2008 「アメリカ考古学における倫理規範、法規、返還問題」(北海道大学国際シンポジウム資料)、札幌、北海道大学アイヌ・先住民研究センター
- Watkins, J. 2000 *Indigenous Archaeology: American Indian values and scientific practice*. CA, AltaMira Press.
- Zimmerman, L. 2001 Usurping American Indian Voice. In T. Bray (ed.) *The Future of the*

Past: Archaeologists, Native Americans, and Repatriation, pp. 169-184, New York, Garland Publishing.

